

# 棚田に吹く風

2013  
**春**  
Spring  
季刊



## 2 特集 棚田の畦

5 フォトエッセイ  
棚田ごよみ二十四節気

6 棚田・里山からのたより  
地域の宝「棚田」を  
次の世代につなぐために  
～都市部との交流から10年の軌跡～  
長崎県長崎市外海地区・大中尾棚田

8 « 田んぼに入る絵描き »の  
棚田見聞録  
棚田の特産品紹介

9 棚田博士は今日も行く  
英田上山棚田団が再生を図る千枚田  
岡山県美作市上山

12 会員のひろば

14 特別寄稿  
スペインとポルトガルで  
棚田を紹介してきました

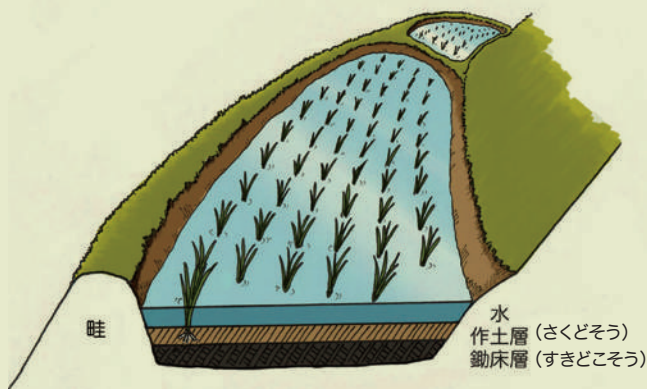
15 Project Report

# 棚田の畦

【あぜ】

田植えの季節はもう間近！  
棚田は、いよいよ水が張られ、苗が植えられるのを今か今かと待ちわびています。  
水張りには、棚田の最も美しい風景であり、田んぼのとても大切な機能ですが、これを支えているのが「畦（畔、畦畔とも表記される）」です。  
棚田の曲線的で複雑な形の畦作りは、平地の直線的で画一化された畦と比べて、コンクリート化や機械化が難しく、今でも手作業で行っている地域があります。  
今号は、棚田のいろいろな畦達を紹介します。

## 畦とは？



【田んぼの構造】

田んぼは大まかに見ると、苗を植える作土層、土をつき固めた水を通しにくい鋤床層、そして土を盛って水が漏れないようにした畦でできています。  
畦の役割はとても重要です。昔ながらの畦は、水を張る前に毎年「畦作り」や「畦塗り」などの手作業で修理を行います。比較的大きな田んぼでは、近年「畦塗り機」も使われます。また、コンクリートの畦や、畦シート、波板などで代用することも多くなってきました。

## 昔ながらの棚田の畦（静岡県松崎町石部棚田の畦）

石部棚田では、今でも昔ながらの畦作りが行われています。駿河湾の西風が吹き上げる2月下旬頃から、昨年使った畦を鍬で削るように切る「畦切り」が行われます。

これは、ヒビや割れ、冬にモグラがあけた穴などを、畦を切ることによって探し出し、杵で叩いて修復する大切な作業です。そして、代かきが行われた後の4月下旬に、泥を塗って畦の保水力を高める「畦付け」が行われます。

昔はギリギリまで切つて、3段に泥を付ける「本畦付け」を行い、できる



畦付け



畦切り

だけ苗を植えるスペースを取りましたが、今では、広めにとって2段に泥を塗る簡易版が主流です。

急斜面で足場の悪い田んぼの中で行う畦作りの作業は、とても重労働です。石部棚田では、近年、保存会の高齢化で難しくなってきたこの作業を、静岡県富士市にある常葉大学の学生ボランティアの協力で継続しています。石部の畦作りは、松崎町のなまこ壁を思わせる美しい伝統技術です。なんとか後世まで残すために、地域は日々努力をしています。

1:「畦切り」 畦を半分切って傷んだ所を杵で叩いて修復／2:「畦塗り」 泥を盛って畦を塗り上げて行きます／3: 畦完成





高知県仁淀川町長者

## コンクリートの畦

石積の棚田に多い



兵庫県多可町岩座神



岐阜県八百津町北山

## 畦平シート 畦波シート

塩化ビニールやプラスチックでできた畦シート。平らなものと波状のものがある



畦波シート



岐阜県恵那市坂折棚田

## 畦波板

畦波シートが板状になったもの。ジョイントして使う



畦波板



畦塗り機

## 畦塗り機

比較的大きな棚田では、小型の畦塗り機が使われるところもある



和歌山県海南市海老谷

※上の写真の機械は畦塗り機ではありません。



# 棚田ごよみ 二十四節気

写真・文 青柳 健二

## 立夏

りっか

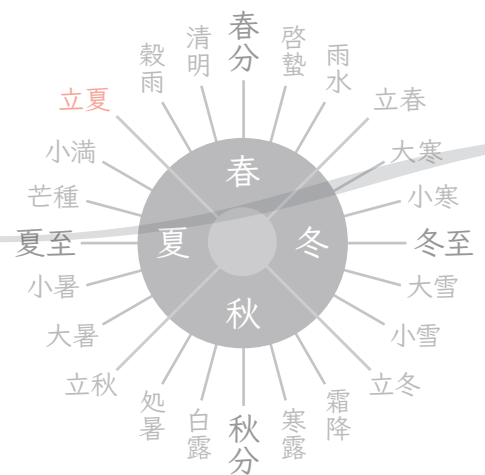
毎年5月5日ころは二十四節季の「立夏」で、田植えの直前だ。立夏の期間の七十二候の初候が「蛙始鳴」。夢中になって夕景を撮っていて、ふと気がつくあたりが暗くなり、自分ひとりだけになっている。そんなとき蛙が鳴き始める。蛙でも寂しさがまぎれるのはありがたい。鶏もそうだが、いつせいに鳴いていつせいに鳴き止む。何がきっかけなのだろう。中にはフライングをして鳴き始める蛙一匹。みんな同じにできないやつはどこにでもあるものだ。そんな蛙に親近感を覚えながら漁火を遠くに見ながら暗い棚田をあとにする。



山口県長門市  
東後畑の棚田

### 青柳 健二 Profile

1958年、山形県河北町生まれ。山形大学工学部卒業。日本を含むアジア各地の稲作文化、とくに棚田とそこに暮らす人々を撮影し、新聞、雑誌、写真展で発表。主な著書は『日本の棚田百選』（小学館）、『棚田を歩けば』（福音館書店）、『花咲（わらう）』（廣済堂出版）など。2012年には棚田ネットワークの旧暦棚田ごよみ製作に全面協力。  
<http://www.aoyagikenji.com>



棚田・里山  
からの  
たより



## 地域の宝「棚田」を次の世代につなぐために ～都市部との交流から一〇年の軌跡～

長崎県長崎市外海地区・大中尾棚田



上：田植え／下左：子供たちの田植え／下中：かけ干し／下右：棚田とそば畑

長崎市の北部に位置する外海地区（平成17年に合併した旧外海町）に、日本の棚田百選の「大中尾棚田」があります。面積は約八畝、棚田の枚数は約450枚あります。外海町誌によると、一七四六年に大村藩主が知行開きをしたとされ、今から二六七年も前から米作りが行われてきたことになります。

水源が近くにないため、神浦川の上流から四・二キロの大井手水路を使って水を取り入れています。大型の機械など何もない時代に、水路を作り、田を開いた先人の苦労を思うと、「自分たちの代でこの棚田を失くすわけにはいかない。何としても次の世代に伝えていきたい」と強く思うのです。

### 大中尾棚田保全組合の設立

平成11年七月、日本の棚田百選の選定を受けたことをきっかけとして、棚田を中心とした都市と農村の交流事業に取り組むことにな

りました。

当初は「何にもない所にお金を出してまで来る人がいるのだろうか」という疑問を持つ人がほとんどでしたが、町が企画したモニターツアーで訪れた人から「日本の原風景がこんなに近くに残っていたなんて……感動しました」という言葉を投げかけられたり、実際に「米作りを体験したい」と相談されたりするうちに、地元でも、この棚田を守るために何か事業を興そうということになり、平成14年に、それまでの「大井手水路保全組合」を母体として、地主等を含む42名で「大中尾棚田保全組合」を設立しました。

### 県下初の取組み

組合発足後、棚田を活かした交流イベントとして「案山子コンテスト」や「フォートコンテスト」などを企画し、現在は「棚田火祭り」を開催していますが、棚田での米

作りをより多くの方に理解していただくために取り組んだのが「棚田オーナー制度」です。全国的にはすでにあちこちで始まっていますが、長崎県では初めての取り組みであり、組合はもちらんのこと、行政にも相談しながら、体制を整えて行きました。

手探りでのスタートでしたが、2年目には11組に増え、10年間のうちでは47組の申し込みをいただいた年もあります。リピーター率は70%近くあり、作業体験時には、毎回一五〇名を超える方にお越しいただいています。

保全組合では、子ども達のために、毎年どんな遊び用の田んぼを準備します。最初はぬかるんだ田んぼになかなか足を踏み入れない子どもたちも、帰る頃には全身泥んこになって遊び、アカハラやカエルを捕まえたりしています。

## 嬉しい反応

棚田オーナー制度を始めたあと、学童保育クラブや保育園などの田植え・稲刈り体験も受け入れるようになりました。正直、小学生低

学年以下の子ども達が植えた田んぼは後で植え直しが必要なので、非常に手間がかかりますが、保育園の先生から「田んぼに行くようになってから、ご飯を残さず食べるようになった。ご飯一粒一粒を大切にすることができた」という喜びの声を聞くことができました。そして、リピーターが増えて行くと同時に、オーナー側から作業支援の声が高まり、四・二の水路掃除に毎年多くの方が参加して下さるようになりました。おかげで、三日近くかかっていた作業を一日で終わることができるようになったのは、大変有難いことです。

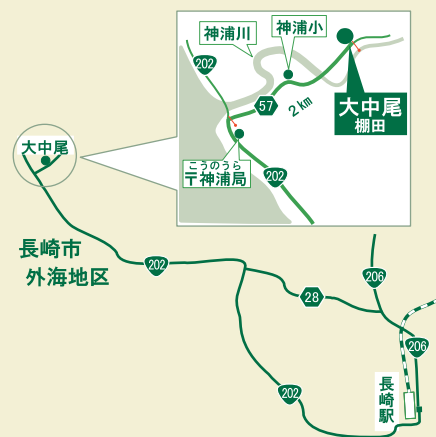
## ■ 棚田へのアクセス

【公共交通】 長崎駅前より板の浦行のバスに乗車。神浦（こうのうら）郵便局前下車、徒歩2km。

【自動車】 長崎駅前から国道202号を西へ、神浦郵便局前を右折し県道99号に入る。総行程約38km。所要時間約60分

## ■ お問い合わせ

大中尾棚田保全組合 会長 竹本久一  
Tel.0959-24-0533



上：棚田と彼岸花  
下：かけ干し



## 仲間たちとのつながり

長崎県内には、日本の棚田百選の棚田が六ヶ所あり、毎年持ち回りで棚田保全代表者会議（長崎県棚田サミット）を開催し、互いに研鑽を深めています。また、全国棚田（千枚田）サミットに参加する中で、各地でそれぞれに頑張っている仲間たちと出会い、いろんな情報を得て、地元の活動に活かせるよう努めています。

## これからの中尾棚田

三年前より、後継者育成のために棚田保全組合が中心となって、意

見交換会や研修会を開催し、後継者同士もつながりが持てるように働きかけています。また、棚田での米作りや交流活動を支援していただくために、行政と一緒に、新たに「トラスト制度」に取り組もうと準備を進めています。

棚田保全組合の約七割が65歳以上となりましたが、これからも自分たちに出来ることを少しでも長く継続できるよう、皆さんと力を合わせて取り組んで参ります。

地域の宝「大中尾棚田」を次の世代につなぐために…

大中尾棚田保全組合 事務局

# 《田んぼに入る絵描き》の 棚田見聞録

私は「棚田」の他に「雪形」をテーマに描いています。雪形については『棚田に吹く風』の第85号にも取り上げられた如く、農事暦の民俗文化があります。

最近春の棚田取材に雪形と一緒に、または逆に、雪形取材時に棚田も一緒に、ということも多くなっています。

この「藤里駒と横倉」も、その一つです。棚田に「棚田ネットワーク」や「棚田学会」があるように、雪形にも「国際雪形研究会」があります。研究会では毎年春に「雪形ウォッチング」なる各地の雪形を探访するツアーがあります。2012年4月の雪形ウォッチングは秋田の藤里駒ヶ岳の駒や大平山の鶴を見に行きました。藤里町は「白神山地」（世界遺産）の南側の入口です。

町の北側の横倉という集落に棚田を見つけました。この棚田も近年、保全活動が行われているとのこと。駒の出現した藤里駒ヶ岳と横倉の田を春秋図として描きました。



藤里駒と横倉 (117×91cm 2012年10月)

絵・文 酒井 英次

岐阜県恵那市の坂折棚田は、400年の歴史を持つ美しい石積みみの棚田です。保全の動きは90年代後半から。2003年に恵那市で全国棚田サミットが開かれ、その後、NPO法人として再編されました。オーナー制度や石積み塾、フォトコンテストとカレンダーの制作、特産品の開発など、活発に活動しています。



右：坂折棚田全景／上：さかおりお茶番処



特選  
棚田の逸品

第二回  
坂折棚田のお酒



千古乃岩 純米吟醸原酒  
さかおり棚田米仕込み

千古乃岩酒造は、明治42年創業の岐阜県土岐市にある酒蔵で、地元のお米を使った酒造りを行っています。そうした中、地元で活動されているNPO法人恵那市坂折棚田保存会の田口理事長とお会いする機会があり、3年前より坂折棚田で作られたお米を使った地酒を醸すようになりました。

保存会の皆さんが真心込めて作られた棚田米と、酒蔵の地下45℃から汲み上げる硬度7の超軟水のみで丹精込めて出来上がった「純米吟醸原酒 坂折棚田米仕込み」は、穏やかな香りと原酒の力強さがあり、米の旨みを十分に引き出しながらも、キレのある味わいとスッキリとした口あたりで、お食事を引き立てる辛口酒です。

千古乃岩酒造株式会社 Tel.0572-59-8014  
<http://chigonojiwa.jp> ← HPでこちらのお酒を購入できます。

720ml 2100円(税込)  
1.8ℓ 4200円(税込)



# 棚田博士 は 今日も行く!

中島峰広の  
全国棚田行脚

## 英田上山棚田団が再生を図る千枚田

岡山県美作市上山



### 棚田を展望できる上山神社へ

美作市は、県の北東端にあり、2005年3月に宮本武蔵の生誕地として知られる大原町など6町村が合併して誕生した田園都市。上山は、美作市の最南端、旧英田町の中心市街地福本の南5キロに位置する標高200〜350メートルの丘陵地にある。上山の千枚田は、1995年に私が作成したわが国の主要な棚田景観72地区の一つに選ばれているが、耕作放棄が著しく、1999年に選定が行われた日本の棚田百選には町が推薦を見送ったものと思われる。私も1998年3月に訪ねているが、上山の千枚田と称賛された景観は耕作放棄により荒廃が進み、見る影もなかった。再訪したのは、英田上山棚田団による千枚田再生の活動が目覚ましいことを知ったからである。

2013年3月に上山を訪ねた。岡山駅前12番乗場から発車する林野行の宇野バスが利用できる唯一の公共交通機関。1日10便の運行があり、途中の福本で下車、およそ1時間30分を要する。福本からは交差点を右折、かつて英田町の役場であった支所の前を通り、県道414号を河合川に沿って遡る。標高100メートルの中礫で右折、中国自然歩道に入り坂道を上ると、すぐに大字上山の一集落である金合の棚田が見えてくる。さらに自然歩道を進み、奥塩田へ向かう丁字路を左折すれば、上山の中心、標高290メートルの棚田が展望できる上山神社に到着する。

上山神社の展望台から南面すると、目の前に坊の棚田がある。坊・

### なかしま みねひろ 中島 峰広 (棚田博士)

早稲田大学名誉教授。学術博士。NPO法人棚田ネットワーク代表。全国棚田(千枚田)連絡協議会理事、棚田サミット開催地選定委員会委員長。1933年宮崎県生まれ。早稲田大学教育学部地歴科卒。2004年まで早稲田大学教育学部教授。著書に『日本の棚田—保全への取り組み』『百選の棚田を歩く』『続・百選の棚田を歩く』『棚田 その守り人』(以上、古今書院)。現在、百選外の棚田についての執筆準備のため全国行脚中。

薬師堂・八伏を周回する道路より上、民家背後の傾斜4分の1の斜面には40段ほどの棚田が階段になっている。石積みの高さ2メートル前後、一枚2〜3メートルの棚田は一旦放棄されたが、英田上山棚田団によって半分ほどが復田され、現在は米と蕎麦が作られている。

### 棚田再生の第一ステージ 用水路・堰の維持作業

この地における英田上山棚田団による棚田再生の活動は、ホップ・ステップ・ジャンプの3つのステージに分けることができる。第1ステージのホップ期は棚田団の母体



1：棚田は、大字上山の8集落に分散してみられる。これらは、薬師堂・坊・八伏・空・中組・金合・小山・後谿（うしろさこ）の3つのグループに分散、一望に収めることはできない。展望台の案内板には、かつて上山の千枚田とよばれ、100%、8300枚が数えられたと書いてある。／2：少しづつ復田がすすむ



3・4：棚田団の活動拠点「さいばう庵」。新しき大囲む田舎の場にもなっている。



となつた大阪の協創LLP (Limited Liability Partnership) が活躍した時期。LLPは、有限責任事業組合のことで、3万円の会費で社員になり、社員が連携して事業を行い収益の10%を組合に納めることになっている。協創LLPは社員65名で代表社員は電通のOBだそう。

上山での活動は、棚田団の団長石黒佳世樹さん（44歳、下水プラント会社勤務）の父親石黒豊彦さんが2000年に八伏の空家だった古民家を購入、「静軒」と名付け田舎暮らしを始めたことがきっかけになった。豊彦さんは74歳、貿易商社に勤務した後、50歳で退職独立し上山に移住、貿易の仲介や翻訳を行いながら2枚、12ヶの棚田を借りて農作業を始めた。とこ

ろが、借りた棚田が大芦池から坊・薬師堂・八伏を回って水が届くため、用水路の長さが3キロもあり、田づくり前に大掛かりな堰払い（用水路の掃除）を行う必要があった。過疎高齢化したむらではその維持作業は容易ではなく、豊彦さんは息子の佳世樹さんに助けを求めた。2004年に初めて堰払いに参加した佳世樹さんはその大変さから、立ち上がったばかりの協創LLPの社員に協力をよびかけ、活動はステップ期に入ることになった。

## 第2ステージ 英田上山棚田団が中核に

第2ステージのステップ期は英田上山棚田団が活動の中核になった。2007年に、佳世樹さんが自ら団長になり英田上山棚田団（当初の名称は協創ダツシユ村）を結成、毎月1〜2回、毎回15〜50人規模の参加者を協創LLPから募り、堰払いや耕作放棄地の敷払い、草刈りの作業を始めた。その団員の一人が従兄西口和雄さんであり、佳世樹さんのよき相談相手になるとともに「静軒」宅に寄寓し、現地活動の責任者になった。

西口さんは46歳、専門学校を卒業後、朝日住建、鹿島建設、トヨタホームなど住宅建設会社に勤務した後、上山に隣接する和気町の山林60畝を購入、36歳の時に自伐林業家になっていた。棚田団の作業は1年目敷払いと草刈りに終始した。2年目の2008年になると隠れていた棚田の石垣が一部見えるよう

になり、3枚、6ヶの棚田を復田し、180キロの米を収穫した。

2009年には、このような棚田団の活動を見ていた地元民や行政も棚田再生の取り組みが本気であることを認め、行政の後押しをえて地元民と協創LLPが協力して行う上山棚田再生事業実行委員会が立ち上げられた。

一方、棚田再生は事業実行委員会が立ち上がったことにより加速し、地元民と協力して敷払いや草刈りよりも効果的な火入れが模索され、行政の協力をえて消防署から許可をもらい、12月に棚田団50名、地元消防団30名、総勢80名、消防車を待機させて野焼きが行われた。数時間後、草が焼き払われた跡には、焼け灰で黒くなっているが幾重にも重なった棚田の石積み姿を現し、一同を感動させた。この年、棚田団では復田した棚田9枚、20ヶで800キロの米を収穫した。

2010年、棚田団の現地活動に強力な助っ人として地域おこし協力隊（※注1）が加わった。西口さん自身が協力隊員になって隊長を務め、他に美作市で採用された清田豊さん、水柿大地さんの2名

が上山地区の担当になった。清田さんは35歳、奥さんと子供の3人家族で大阪からの移住、訪問介護からの転職である。水柿さんは23歳、東京都あきる野市からの移住、法政大学社会福祉学科3年の学生。大学を1年間休学、現在は毎週水曜日岡山発の夜行バスで上京、木・金曜日大学、金曜日の夜行バスで帰宅し、土曜日から水曜日まで棚田再生活動に従事している。

また、助っ人としてヤギ雄4頭、雌2頭、ウシ2頭を導入、草刈り作業の軽減が図られた。

さらに、新しい取り組みとして、棚田団と協力隊は共同作業で竹藪のなかに隠れていた廃屋を葺払いした後、手を加えて民家に再生、傍らに立つイチヨウの木に因み「いちよう庵」と名付けた。

2011年、棚田団は法人資格



「いちよう庵」の庵主は水柿さん。ここに住み、土・日曜日はコーヒー・紅茶・ケーキなどを提供するカフェをひらき、都市住民との交流の場になっている。



を取得、NPO法人英田上山棚田団と名称を改め、事務所を「いちよう庵」に置き、個人会員100名（会費3千円）、法人会員20（会費1万円）、西口さんをはじめとする理事19名で構成される組織になった。メンバーは協創LLPや地域おこし協力隊などからなり、理事長はLLPの社員である猪野全代さん60歳がなった。

### 第3ステージは 棚田団+MLAT

2013年からは第3ステージのジャンプ期に入り、棚田団と協力して再生活動の中核を美作市認定農業法人が担うことになっている。これは、西口・清田・水柿さんの3名が2013年3月で地域おこし協力隊の任期を終えるのに伴い、農水省の新しい事業、人・農地プラン（※2）の導入に対応した変更ともいえる。

上山では西口さん夫妻と水柿さんのほか、美作市の他の協力隊員が加わりMLAT（Mimasaka Local Activation Team 美作市地域おこし協力隊員）が中心になって、出資金103万円、棚田団が再生した

12畝の棚田と西口さんが所有する山林180畝を基盤にし、中核経営体としての農業法人を4月に立ち上げる予定。これにより、西口さんらは協力隊から新規青年就農者となり、引き続き政府の給付金を受けながら棚田再生の活動に従事できる体制が整うことになる。

ここで見られるような、都市住民が主体となり、政府の施策をいち早く取り入れ、スピード感のあるダイナミックな展開で棚田を再生する活動は、過疎高齢化で耕作放棄が進む棚田地域においては担

い手を確保する有効な方法として参  
考になるのではないだろうか。

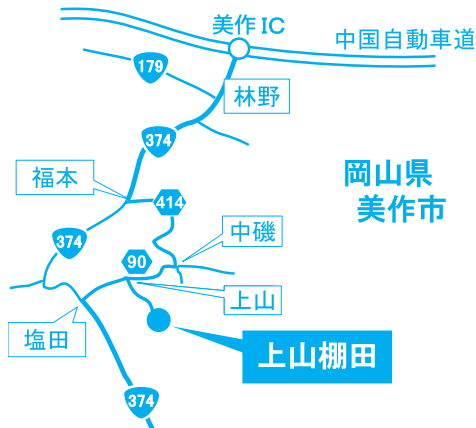
#### ※注1

総務省所管の青年海外協力隊の国内版。意欲ある都市住民が過疎・高齢化した地域へ移住し、地域力の維持・強化に取り組めば3年間、年間350万円が支給されるという制度。

#### ※注2

将来の担い手不足対策として、中山間地域では10〜20畝規模の中核経営体の設立と地域農業マスタープランを作成すれば、農地の受け手には規模拡大加算金、出し手には経営転換協力を支給し、地域内での新規青年（45歳未満）就農者に対しては年間150万円、最長5年間給付金を与えるという制度である。美作市では、新規就農者に対して、さらに50万円上乘せして210万円の支給を約束している。

#### 上山棚田へのアクセス



【公共交通】岡山駅前から林野行バス利用福本下車。バス停より徒歩8km（全所要時間約3時間）

【自動車】山陽自動車道・和気ICより国道374号を北上、塩田を右折し県道90号に入る。ICから23km約40分。または、中国自動車道・美作ICより国道374号を南下し福本より県道414号、県道90号経由。ICから22km約40分

## 会員の声

### ツーショット

神奈川県川崎市 萩谷 敦

私が写真を始めたのは商社マンとしての任地サウディアラビアの文物を撮ることだった。帰国後サウディアラビアというモチーフを失い、あれこれ迷った末出会ったのが棚田だった。

あれは新潟の棚田を撮り始めて2年目の平成21年秋のこと。十日町市松代のあぜ道から、稲刈りに励んでいるご夫婦の写真を撮らせて貰った。その年は秋口の強風のため、多くの稲が倒伏し、機械で稲刈りする前に、倒れた稲を棒で引き起こすという厄介な作業がお百姓さんたちの肩の上にのしかかっていた。その田圃ではご夫婦二人で稲を起こし、ご主人が機械を運転して刈り取っていた。

何枚かシャッターを押した後、ご夫婦でツーショットを1枚お願いすると、いやな顔もしないで応じてくれた。撮影を終えお礼を言って名刺を渡し、Nさんという、そのご夫婦のお名前と住所をメモしてその日は失礼した。

帰京後プリントした写真を数枚Nさんにお送りした。これはアマチュアであっても写真家としては是非励行したい作法。レンズを通じて未知の方々と友達になれる。

翌年4月、突然N夫人から1枚の葉書を受け取った。あろうことかご主人が稲刈り作業を終えてから体調を崩し最近亡くなられた。そしてあの時の写真がご主人と二人で撮影した



最後のツーショットになったと書かれてあった。

私は折り返しA4に引伸ばしたツーショットと、

あの時に撮ったNさん夫妻の作業風景の写真全部を入れたCDをN夫人に郵送した。そしてその後松代のN家に立ち寄り焼香させていただいた。その時N夫人はお留守だったが、お嬢さんと生まれたばかりのお孫さんにお会いした。お嬢さんからN夫人が私のお送りしたA4版の写真を思い出としてとても大切に下さっているというお話を伺った。下手でも写真をやっていて良かったと思った。こういうのを写真家冥利に尽きるというのであろうか。

最近この文章を書くに当たり、N夫人に電話でお許しをいただいた。今、N夫人はご主人のご他界直後に生まれたお孫さんに加え、もう一人のお孫さんも生まれ、お元気にしておられるというお話だった。



## 会員のひろば



### 会員の声募集!

「こんな活動をしています」「こんなことやります」という皆さんの声を編集部までお寄せください! (ご要望、感想やご質問でもOK!) (会員の声800字まで、会員レポート400字まで。写真も添えて) 〒160-0023 東京都新宿区西新宿7-11-16 トーシンハイム704号「棚田に吹く風 会員のひろば」宛 メールでも受け付けています ↓ [hiroba@tanada.or.jp](mailto:hiroba@tanada.or.jp)



### 会員のBest Shot!

#### 会員のみなさんのベストショット募集!!



みなさんが撮影した棚田や作業風景の写真など、ベストショットをコメント(70文字程度)を添えて編集部まで送ってください。毎号、紹介させていただきます! 送り先は下記。

〒160-0023  
東京都新宿区西新宿7-18-16  
トーシンハイム704号  
「棚田に吹く風 ベストショット」宛  
メールでも受け付けています  
⇒ [hiroba@tanada.or.jp](mailto:hiroba@tanada.or.jp)



ホッとひと息 長野県大町市美麻 大門 正明

きつい復田作業中。木陰で白馬三山を眺めながらひと休み

# 棚田散歩



東京から大阪へ越してきて感じている大阪のすばらしいところの一つは、昔ながらの景色を残す農村地域へのアクセスが良いことです。梅田から電車で20分ほどのところにある自宅から車でおよそ20分走るだけで、棚田にも出会うことができます。

昨年の秋のお彼岸の頃、1歳の娘と夫との3人で、棚田の山際の道にお弁当を広げて過ごしました。田んぼのそばでおにぎりをほおばる、たったそれだけのことで、本当に気持ちが良く、最高の休日になりました。

「この田んぼでご飯ができるんだよ」と娘に教えたのですが、まだよくわからないようでした（笑）。でも、彼岸花や小さい虫さんには、おっかなびっくり小さい手を伸ばしていました。

私自身田舎育ちのため、棚田こそ近くにはなかったものの、春にはれんげで髪飾りを編み、秋にははんぱんになった稲穂の香りが立ち込める畔道をおとつと、と落ちそうになりながら走ったりする少女時代でした。娘にもできるだけ自然の中で遊んで、いろんなすばらしい体験をしてほしいと願っています。次の世代に受け継ぎ残したいものをちゃんと残していくことは、大人が背負う大きな責任だなあと感じています。（大阪府豊中市 宮川亜希子）

棚田でピクニック



## 編集部イチオシ! BOOK & MOVIE



2012年／フランス／118分／監督：ジャン＝ポール・ジョー／2013年6月8日（土）渋谷アップリンクほか、全国順次公開

2009年、フランスで「ラットの一生（2年間）に遺伝子組み換えトウモロコシを与え続ける」という実験が行われ、世界中が大きく注目をした。その研究結果に密着しさらには世界2位の原産保有国であるフランスの「原産がある風景」も捉え、日本の福島原発事故以降世界が受けた影響と、そこに住む有機農家の姿をカメラは追う。原発と遺伝子組み換えのいのちの根幹を利用した二つの技術の意外な共通点。暴走するテクノロジーのその先に、どんな世界が待っているのだろうか？

世界が食べられなくなる日



花咲うゝ被災地の櫻と復興



写真：青柳 健二  
文：玄侑 宗久

¥1,260円（税込）  
廣済堂出版  
2013年2月

「櫻と笑顔に明日を見る、被災地の櫻が築く復興の礎」写真家・青柳健二氏が東日本大震災のあった2011年、翌2012年と被災地（岩手県陸前高田市、宮古市、釜石市、宮城県気仙沼市、石巻市、福島県南相馬市、浪江町、飯館村等）の桜と復興に向かう人々を撮影した写真集。作家・玄侑宗久の「櫻と東北」も併せて掲載されており、見ごたえ・読みごたえのある一冊となっている。尚、青柳氏は今年も桜前線を追い被災地の櫻と人々の笑顔を撮影予定だそう。

特別寄稿

## スペインとポルトガルで棚田を紹介してきました

NPO 法人棚田ネットワーク事務局長 高桑智雄



1



2



3



4

1：サン・セバスチャンでのごはん炊き講座／2：リスボンでの棚田講座／3：マドリッドの料理専門学校でのワークショップ／4：リスボンの観光専門学校。左から高桑、通訳さん、飯田貞広さん

この度、「独立行政法人国際交流基金」の依頼で、スペインとポルトガルの3都市で棚田と日本のお米文化を伝える「棚田ごはん講座」の講師を務めてきました。実は棚田ネットワークの熱心な会員さんが基金のマドリッド日本文化センターの所長を務めていて、ぜひヨーロッパで一番お米を食べる両国に、日本の棚田の魅力とお米の美味しさを知ってもらいたいということで実現した企画でした。

3月6日に日本を発って、12日間、全9回の講座を行うハードスケジュールということですが、若手である私がお会を代表して参加することになりました。現地では、美味しい棚田米も味わってもらうために名古屋在住のごはんソムリエ飯田貞広さんをもつ一人の講師として、スペインのサン・セバスチャン、マドリッド、ポルトガルのリスボンで、料理人、料理人を目指す学生、一般市民など多彩な受講者を集めての講座を行いました。

「棚田米百選」の協力で、日本から持って行った四谷千枚田と樫平の棚田米は、スペイン、ポルトガルの方々に大好評で、日頃現地で食べられているスペイン米との食べ比べなども行いましたが、明らかに棚田米の方が美味しいとの感想を頂きました。また、日本の棚田にもとても興味を持って頂き、みなさんぜひ棚田に行きたくなったそうです。

今後は、逆に日本の棚田に、スペイン、ポルトガルの方々をお招きするなどの棚田を通じた国際交流を継続して行きたいと思っています。

## 栃木県茂木町

### 茂木プロジェクト

#### 田植えの準備が着々と進んでいます



タネツケバナ



今年の春は3月中に初夏を思わせる暖かい日があったり、寒の戻りに見舞われたり、ほころび始めた桜も戸惑うような変化の激しい日々が続きました。

4月になっても北関東では遅霜の注意報が出たりしていますが、岩の作棚田では田植えの準備が着々と進んでいます。畦では既にタネツケバナが咲き始めました。この花の名は漢字では「種漬花」書くそうです。昔から農家ではこの花が咲くのを見定めて種もみを水に漬けて冬の眠りから目覚めさせ、苗代に播き始めたそうです。今年もすでに苗作りが始まっています。田植えは、5月11日（土）です。また皆でドロンコになりながら、ワイワイガヤガヤ楽しく遊びましょう。若葉の緑が一年中で最も美しく、生きものたちでいちばん賑わう季節です。皆さまのご参加をお待ちしています。（安井 一臣）

## 岐阜県恵那市

### 棚田ビオトープ プロジェクト

#### 「第6回かえるの卵を探そう！」報告



初春の水溜りに卵を産むヤマアカガエルの卵塊を探す「第6回かえるの卵を探そう！」が2013年3月24日（日）10:00から15:00まで開催されました。18日に棚田ビオトープの管理をして頂いている鈴村さんから「山赤蛙今朝初産卵しました。」と携帯メールがありましたので、今年も参加者の皆さんに卵塊をお見せすることが出来ると安心しました。今年は子供連れの参加者が多く、午前、午後あわせ15名が参加、棚田ネットワークからは高野さんが参加しました。晴天の中、ヤマアカガエルの特徴などを話しながらハイキング気分で調査、その結果、10ヶ所で86卵塊が見つかりました（昨年は19ヶ所で78卵塊）。4月になったら追調査する予定です。

（相田 明）

## 静岡県松崎町

### 昔ながらの米づくりプロジェクト

#### 畦切りと養口づくり



畦を切っています



参加者に養口づくりを体験してもらいました

3月16日（土）・17日（日）第1回「畦切りと養口づくり」を行いました。2日間とも好天に恵まれ、春の暖かさが感じられる気持ちよい陽気の中での作業でした。1日目は「畦切り」これは今号の特集でもありましたが、

昨年の畔を半分切り崩し、傷んでいる場所を杵で叩いたり土で埋めながら修復する作業。2日目は「養口づくり」。これは他の棚田では見られないこの地域独特の藁で編み上げる取水口。こちら保存会の方に教えてもらいながら参加者自ら体験してもらいました。最初は難しいけれど、コツをつかめば「ハマル、とのこと。4月には「畔塗り」、5月は「田植え」と作業体験が続きます！一緒に棚田で汗を流しましょう！（久野 大輔）

# 佐渡ボランティアツアー 2013

みんなでつくる棚田合宿 **2泊3日**

**7/13・14・15** 海の日 月祝

今年も  
やります!



世界農業遺産にも登録された佐渡島での合宿形式の体験・交流ツアーです。棚田おじさんと一緒に海を見下ろす棚田を散策しながら棚田のお話を聞いたり、放鳥されたトキの餌場となる棚田ビオトープを整備・復旧したり、地域の方々と交流会など盛りだくさん。美しい佐渡島の棚田を肌で感じてください!

棚田おじさんとゆく岩首棚田散歩

朱鷺の餌場ビオトープ整備

地域の方々と交流会

など予定

■ 詳細は5月より棚田ネットワークWebサイトにてご案内します。

⇒ <http://www.tanada.or.jp>



■ お問い合わせ・お申し込み 棚田ネットワーク Tel / Fax 03-5386-4001 e-mail : [info@tanada.or.jp](mailto:info@tanada.or.jp)

棚田の  
応援団

わたしたちと「棚田の応援団」やりませんか!

棚田ネットワークは「棚田の保全に協力したい!」という会員によって自主的に運営されているNPOです。消えゆく美しい「棚田」をどのように保全していくことができるのでしょうか?一緒に考えませんか?ぜひ、私たちと棚田の応援団になりましょう!

会員に  
なると!

会報誌「棚田に吹く風」(年6回)やイベント案内お届けの他、棚田ネットワークが主催する各プロジェクト(イベント)への参加や、スタッフとしての活動もできます。

年会費

○個人会員

維持会員 1口1万円(1口以上)  
一般会員 3,000円  
学生会員 2,000円

法人会員を募集しています!

私たちの活動にご支援・ご協力をいただける、企業、団体、事業主さまを募集しています。詳細はお問い合わせください。

年会費

○法人会員

1口3万円(1口以上)

この上のスペース(ページ上1/2サイズ)は法人会員さまのPRスペースとして広告や広報にご利用いただけます。(詳細はお問い合わせください)

2013年度になつて初めての会報ですが、残念ながらお知らせをしなければなりません。表紙を見た方はお気づきかも知れませんが、会報が「隔月刊」から「季刊」に変わりました(今回が春号)。年6回と年4回では気持ちの上でも大きな差があるのですが、財政事情による止むを得ない結論です。代わり各号あたりのページ数を増やしたいと思つても、16ページから20ページにするとページ単価がガクンと上がるので、それもできず。せめて中身をさらに充実させたいと思つています。

今回の特集は「棚田のあぜ」。「畦」とも「畔」とも書きます。この二つの違い、いくら調べてもわかりませんでした。どなたか教えてください!

編集部から

ホームページのぞきを見て!

棚田ネットのWebサイト  
イベント情報、ブログ等  
随時更新中!!



<http://www.tanada.or.jp>

棚田に吹く風

2013年 春号 Vol.88

発行



NPO法人

棚田ネットワーク

〒160-0023

東京都新宿区西新宿 7-18-16 トーシンハイム 704 号

Tel / Fax 03-5386-4001

e-mail : [info@tanada.or.jp](mailto:info@tanada.or.jp) URL : [www.tanada.or.jp](http://www.tanada.or.jp)

郵便振替口座 : 00100-7-151565